

## 人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例

### 1. 基本情報

#### ○都道府県名及び市町村名

長野県上水内郡小川村

#### ○学校名

小川村立小川小学校

小川村立小川中学校

#### ○学校のURL

<http://ogawa-element.ed.jp/school/index.php>

<http://www2.ocn.ne.jp/~ogawajh/>

### 2. 学校紹介

#### ○学級数

小川村立小川小学校【通常の学級】 6学級、【特別支援学級】 2学級、  
【合計】 8学級  
小川村立小川中学校【通常の学級】 3学級、【特別支援学級】 2学級、  
【合計】 5学級

#### ○児童生徒数

小川村立小川小学校【全児童数】 108人（平成26年12月1日現在）  
（内訳：1年:16人、2年:17人、3年:15人 4年:24人 5年13人 6年:23人）  
小川村立小川中学校【全生徒数】 64人（平成26年12月1日現在）  
（内訳：1年:25人、2年:19人、3年:20人）

#### ○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

文部科学省人権教育研究指定校研究

#### ○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

小川小学校【学校の教育目標】  
こころもからだもすこやかにして、自ら学ぶ子供  
小川小学校【人権教育に関する目標】  
お互いに相手の気持ちを理解しようと努力し、自分も相手も大切にすることができる態度の育成  
小川中学校【学校の教育目標】  
つよく やさしく 思慮深く  
小川中学校【人権教育に関する目標】  
人権教育の充実  
①自尊・他尊感情を育む教育実践  
②体験型学習の充実（一日小川・サンリング訪問など）  
③コミュニケーション能力の育成（聞く力・話す力・伝える力）  
④小中連携による人権教育の充実

## ○人権教育に係る取組一口メモ

地域の老人福祉施設訪問、地域の方との協働による草刈り活動、お年寄り宅への訪問活動を教材化し、人権教育を実施。

## ○人権教育にかかる取組の全体概要

### 小川村の現状

- ・北アルプスを望む美しい村・子供に対する期待と愛情のある村
- ・少子高齢化が進む村・子供同士の間人間関係が固定化しがちな一村一校の村



- ・子供との関わりを望む村民、とりわけ高齢者の存在
- ・人権意識を高められる多くの地域素材の存在
- ・子供同士の間人間関係で、より深く、より広くしたいという大きな願い
- ・課題に真剣に向き合い、行動できる子供たちの存在



小川村の将来を担う子供たちを育てる指針『小川村教育基本方針』を策定

### 小川村教育基本方針

基本理念 『むら』に学び確かな知性と広い視野を身につけ、高い志にあふれる人づくり



小川小学校 学校教育目標 『こころもからだもすこやかにして自ら学ぶ子供』

小川中学校 学校教育目標 『つよく やさしく 思慮深く』



### 人権教育 研究テーマ

ふるさと教育をベースにした人権教育 ～ふれあう「実体験」を通して

広い世界



身近なこと

様々な人権課題に対応する力の醸成



人権感覚の高まり 自尊感情・他尊感情の高まり



自然の恵みへの感謝・地域の方への感謝  
先人への感謝・小川村への感謝



ふるさと小川でふれあう実体験をすれば ⇔

教師自身が小川村を知り、小川村に即した教育活動が行える。  
そして小川村に愛情が持てる。

## 3. 特色ある実践事例の内容

### ○研究内容

- 1 小中連携及び校内連携

○一村一校の小川村 → 小中の連携の強化が可能

(1) 具体的な連携の強化

- ・小学校から中学校へ、下級学年から上級学年へ
- ・中学校から小学校へ、上級学年から下級学年へ

(2) 具体的な内容

- ・小学校（中学校）では、こんな人権教育・地域活動をしている。
- ・こんな力をつけておくことが望ましい。
- ・今、このような学級、子供の実態がある。どのような対応が望ましいのか、一緒に考えよう。

2 日々の実践

ベースとしての日常指導・間接指導があつてこそその人権教育



教師自身が日頃から人権感覚を磨き、人権感覚を意識した行動を心がけなければ、人権教育は成立しない。

↓ その上で

- 人権擁護委員による授業の実践                      ○講演会の実施
- 人権感覚をより磨くねらいをもった授業づくり
- 人権教育をテーマにした学年発表（文化祭にて）
- 人権教育にテーマを絞った意見文発表    ○東日本大震災被災地との交流

3 小川に生きる私を意識した人権教育の推進

(1) 小川小学校

- ・お年寄りとの交流（昼の間交流）
- ・小川保育園との交流
- ・サンリング（福祉施設）との交流

(2) 小川中学校

- ・サンリング交流
- ・薬師沢石張水路工整備作業
- ・お年寄り宅訪問奉仕活動

○「体験的な学習」に関する学習サイクルに位置づく活動になりうるものである。

- ①「体験すること」→②「話し合うこと」→③「反省すること」→  
④「一般化すること」→⑤「適用すること」→①（参考：指導等の在り方編）



体験的な学習における活動の振り返りに関する事例<小学校3年生：総合的学習>

- (1) 単元名 「サンリング（小川村在宅福祉支援センター）のおじいちゃん・おばあちゃんと仲よくなるろう」
- (2) 課題と課題解決のための手立て

○日常の活動の場において、3学年の子供たちは、体を動かす活動や作業的な活動、自分のアイデアを生かしながら体をつかって体験する活動に関心や意欲を持ち、友達とも進んで関わり合おうとする姿が多く見られる。反面、話し合いの際に自分の意見を通そうとして言葉がきつくなってしまう、落ち着いて話し合いができず、思い通りにならないとふてくされて、けんかになってしまう等、相手の話を受け入れることができない姿も見られる。

○お年寄りの方と交流する学習には、友達の意見を認める場面、友達のよいところから自分に活かせそうなことを発見する場面等が多く存在する。お年寄りの方は、子供たちが来るのを楽しみにし、どの子にも温かく関わってくださる。また、福祉支援センターで働く方も、子供たちの努力や一生懸命な姿を認めてくださり、どうすればうまくいかなど一緒に考え支えてくださる。お年寄りとの交流を核にした活動を行うことを通して、自分のよさに気づく、認められる喜びや人に喜んでもらえることの価値を感じる、友達の言動を認めあったりすることの心地よさを感じる等、人権教育の側面から見て、多くの成果が期待できると考えた。

○活動は「体験的学習のサイクル」を基本として、1年を通して交流活動を積み重ねていく。1回の交流を行った後には、自分の姿や友達の姿、お年寄りの反応等についての振り返りを行う。振り返った内容を基にして、次回の実施内容を計画し実施する。活動を積み重ねていくことで、かかわりあいながら活動するよさを味わうとともに、相手の考えや立場を尊重し自分との違いを受け入れて折り合いをつけ、自分や友達のよさに目を向ける力を高めることができると考えた。

### (3) 授業のねらい(本時の主眼)

12月の交流会に向けて準備を始めようとする子供が、これまでの交流の映像を見ることを通して、自分や友達のよいところに気づき、どんな交流会にしたいか考えることができる。

### (4) 授業における人権教育の視点

○お年寄りの状況や気持ちに寄り添って、交流内容を考えることができる。

<価値的・態度的側面>

○友達の意見を尊重し、互いに認め合いながら学習に取り組むことができる。

<技能的側面>

### (5) 実践から得られた効果

#### ①授業での児童の姿と考察

- ・交流活動を積み重ねていることが、子供たちの自信につながっていた。初めは、お年寄りと「何を話すか」「何をしたらよいのか」と、とまどっていた子供たちが、交流を繰り返すことによって、「今度は1人で活動したい。」と計画できるようになってきた。自信は活動への見通しにつながり、お年寄りの様子や反応を見られる余裕をもつことにもつながった。
- ・多くの子供たちが、前回の交流会の映像を見て、友達のがんばっている姿や自分の活動の評価をすることができていた。自分の映像を見て「あー、やっぱり説明の声が小さかった。」と振り返り、次回は「もっと声を大きく出して説明し

たい。」と見通すことができたAさん。「Bさんは、お年寄りと進んで話をしていた。」と友達のよい姿に気づき、「次回は、自分も大きな声で説明できるようにしたい。マジックをやりたい。」と計画ができたCさん。発言や学習カードに記載する言葉の中には次の活動への意欲が感じ取れた。

- ・お年寄りが楽しんでいることを「笑顔から分かる」と映像から感じた子供たちは、お年寄りが笑顔になる理由を「自分たちも楽しんでやっている」ということに気がついた。喜びや楽しさを共有することの価値は日常生活の中での好ましい人間関係につながっていくものと思われる。

## ②取組後に見られるようになった児童の姿

- ・サンリングでお年寄りにあたたかく迎えていただいた子供たちは、何かをやる際、友達の意見に左右されず、良いと思ったことは、自分一人でも行動しようとする姿が見られるようになってきた。また、自分の意見がとおらないとふてくされてしまうなどの姿を見せていた児童も、相手の話に耳を傾けることができるようになり、独りよがりではなく、相手はどう思うのかというを考えられるようになってきた。



地域に根ざした活動を繰り返すことにより人権感覚を高めていった事例

<中学校1年生：総合的な学習の時間>

(1) 単元名 小川に生きる私

(2) 本単元の持つ価値

小川中学校では、村にある国の登録有形文化財である薬師沢石張水路工の整備活動に取り組んでいる。薬師沢石張水路工の作業では、村の方と作業を共にする中で、人々の知恵や懸命に働く姿から、村を大切にしたいという思いを感じ取ることができた。これらの活動を振り返る中で、村の方々が中学生に寄せる期待を知る機会を設け、地域のために自分たちは何ができるかを考えさせていきたい。そうすることで地域とのつながりを実感し、村に生きる自分の在り方を見つめたり、仲間と活動することのよさを味わったりしてほしいと願った。

生徒たちは、困っている仲間がいれば、進んで声を掛けて助け合うことができる。行事の準備、計画において、仲間のよい面を認め合い、高めあっていく姿が多く見られる。このことは保育園から今に至るまで生活するメンバーが変わらず、深い人間関係を築いてきたからこそ見られるよい面である。一方、このことで課題とする面も生じている。自分の思いを十分伝えることなく今まで作り上げた人間関係を守りつつ生活をするとこがある。相手の言葉を聞こ



うとせず、顔色を伺って生活しているようなところも時々感じられる。さらに、学習の場が限られた空間であったため、人との関わり方を学ぶ機会が少なかったこともその原因であると考えられる。

このような子供たちにとって、『一日小川』で様々な人と関わることは、人間関係を広げ、コミュニケーション能力を高め、活動の中で友達の新しい発見をするよい機会であると考えた。また、村での奉仕活動やお年寄り宅訪問をすることで、村に対する自分たちのかかわりの良さを実感でき、村の方から認められたり、生徒自身でお互いの活動のよさを認め合ったりすることができる機会ともなるであろう。そして、こうした活動の積み重ねによって、生徒の自己有用感を更に高めることができるのではないかと考えた。

### (3) 本時の主眼

これまで行ってきた一日小川の活動を振り返り、来年度の活動に向けて希望を持ち始めた生徒たちが、ビデオレターに映る村の方々からのメッセージからお年寄り宅訪問を思い出すとともに「一日小川」の活動から教えられた内容について考えることを通して、村の方々への感謝の気持ちを持ったり、村民の一人として自分自身の存在の価値に気づいたりすることができる。

### (4) 人権教育の視点

- ①進んで自分の考えや経験を伝えたり、仲間の考えに共感したりすることができる<技能的側面>
- ②村を作ってきた人たちへの感謝の気持ちを持ち、自分も一員として行動していく意欲を持つことができる<価値的・態度的側面>

### (5) 実践から得られた効果

- ①グループ活動による個の感想の深化
  - ・個によるシート記入と、実際の発表とが違っていた。みんなの意見に思いをよせた結果、より深まった感想につながったと考えられる。
  - ・キーワードをグループで考えさせたことによって、自分の思いを具現化することができた。
- ②グループ学習、全体での発表によって深まりを見せた生徒の姿
  - ・「みんなで感じ、意見がたくさん出て思ったのは、この2つ（薬師沢石張水路工事刈り・お年寄り宅訪問活動）をやったからだと思う。」
  - ・『小川村の貢献者』ってあるけど、俺たちが大人になったときには、『貢献者』にならなきゃいけない。俺たちが頑張っていかなきゃいけないと思った」と、数十年先の自分の将来に亘ってまでの展望を考えることができた。

### ③授業実施後の生徒意識・行動の変化

- ・村の人に会ったら、大きな声であいさつをする。　・家での手伝いをする。
- ・村の行事に積極的に参加をする。　・笑顔、明るいあいさつを心がける。
- ・感謝の気持ちを行動で表す。
- ・親を大切にしたい。

○身近な「実体験」があったことで、友達の意



見や考えを自分のこととしても通して、より深く自分の「実体験」を振り返り、今後の行動においても想起することができた。

○ふるさとを大事にすることは、自分を大事にすることであり、仲間を大事にすることである。また、その存在には保護者を始め多くの方々の存在があることにまで、生徒は迫ろうとしていた。

○実際の活動に反映できているかの評価はできないものの、村への感謝・親への感謝・先人への感謝の気持ちが持てていることは大きな成果である。

#### 4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

・取組を実施する際に生じた課題

①サンリング訪問を実施する際、中学生であれば徒歩での移動が可能になる。しかし、小学生の場合、徒歩での移動が困難であった。

②薬師沢石張水路工作業においては、土尻川砂防事務所、砂防惣代との連携が不可欠である。また、村内にあるものの、学校より10kmほど離れているため、個々での移動が困難であった。

③お年寄り宅訪問においては、中学生全員が訪問できるお宅をお願いしなくてはならず、そのお宅を選定するのが大変であった。

・課題に対する解決方法

①小学生のサンリング訪問に際しては、村よりバスを用意していただき、それを使って移動することができた。

②薬師沢石張水路工を管理している、土尻川砂防事務所及び砂防惣代との連携においては、村教育委員会が学校との橋渡しになっていただいている。それにより、スムーズな連携をとることができた。

移動については、全校生徒が乗車できるバスを用意していただくことができた。

③学校だけで対応が難しいため、村教育委員会、民生児童委員の皆様にご協力いただき、選定することができた。

#### 5. 実践事例の実績、実施による効果

3. 特色ある実践事例において、記してあるため、ここでは省略。

#### 6. 実践事例についての評価

(1) 公開研究会で示唆されたこと

・個で考えたことをグループで深め、更に全体で考えたことで、思いが更に深まった。

・実際に活動を実施していることで、より子供が主体的になって活動を振り返ることができ、次の活動への意欲を高めることにつながった。

・より子供の気持ちを揺り動かすために、更に自分の思いを語る「話し合う」活動が必要であった。葛藤や困ったことを引き出すことでより高い「分かった」につながったのではないかと。

(2) 指導主事の指導から

○「実体験」のすばらしさを実感できる実践であった。

以下の3点に留意をすることでより望ましい実践となる。

#### ①総合的な学習の時間中での人権教育

人権教育は全教育活動の中で行われなければならない。今回の授業は総合的な学習の時間の中で行われた。そのため、総合的な学習の時間での単元が成立しているかを確認することが必要である。

今回の学習指導案を評価すると、「児童・生徒の実態」→「教材のもつ価値」→「育てようとする資質や能力及び態度」が盛り込まれており、総合的な学習の時間として成り立っている。また、人権教育の視点3つの側面（知識的・価値的・態度的・技能的）がバランスよく位置づけられている。

#### ②学習のサイクルについて

- ・真剣に学習に臨む姿が見られた。耳を傾けてくれる先生や友の存在が日常的にある証拠である。ここが基本である。
- ・座席をグループ学習にしたり、コの字型に変えたりするときも、他を思いやる姿があった。ふだんから人権感覚が育っている証拠である。
- ・単に「自分の存在が認められている」ということだけではなく、今後の自分をも想起していた。ここまでの体験的学習の良さやそこから生まれる関係性の中で人権感覚が高まっていた。
- ・体験で終わらせるのではなく、それをもとに省察することに価値があった。
- ・一般化については、実体験から別の場面に広げる必要がある。県で出している人権リーフレット「いま ここから 自分から」を参照してほしい。

#### ③ねらい→めりはり→見とどけ

- ・見とどけの時間で、生徒が「みんなで思い出すと、自分では気づけない部分まで考えることができた」と答えていた。ここで終わらせるのではなく、どの部分がそうであったのかを問うことで、より深まった学習につながったのではないか。キーワードでの学習も同じである。高まった思いを友と更に話し合うことでよりよい授業が展開できる。

#### (3) 地域の参会者の方からの評価

- ・児童・生徒には、いい目といい芽があることを改めて感じた。体験を通して「視点、発見」をし、「老人が小川の宝」と感じるまでに育っている姿を見て嬉しかった。
- ・人権教育をいじめや差別で扱うのではなく、ふるさと小川村での体験を通して扱ったことの意義は大きい。「一日小川」薬師沢での体験で多くのものを学び、将来につなげていきたいとの声に感動した。
- ・小・中学生ともに、自分たちが事前に準備し、体験を通して、地域の方々への思いやりや自分への自信につながっていることが、本時の授業で表現できていた。
- ・親として教えてあげられないことも、教育委員の方々、先生方、地域の皆様に支えられ、子供たちの成長を感じ、とても有り難く思っております。

#### (4) 成果と課題

- ・ふれあう「実体験」を通して、望ましい人権感覚が身についてきている。より深化させるために、「体験的な学習」に関する学習のサイクルを大切にしてい



つ活動を進めていく。また、児童・生徒の声に耳を傾けつつ、より子供の気持ちに寄り添った望ましい人権感覚についても共有させていきたい。

- ・直接指導に留まらず、ふだんより実践している日頃からの実践（人権教育の視点を設けた教科指導、何気ない言葉がけ等）においても教職員が意識をしていくことが示唆されている。児童・生徒だけではなく、教職員も一緒になって人権感覚を高めていきたい。

## 【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

### 小川村立小川小学校、小川村立小川中学校

地域に根ざした活動を積み重ねることにより、主体的に考え行動できるように工夫された実践事例である。

小学校における「お年寄りの方との交流学習」は、交流後の振り返りを大切にし、そこで見えてきた課題等を基に、次の交流の計画を立てる活動を積み重ねた。この過程が、子供たちの自信につながり、主体的な関わりに変化していった。交流会の映像を使っでの振り返りも効果的である。

文化財を整備する村の取組に参加するという中学校での取組は、自分の住んでいる村に誇りを持ち、大切にしていきたいという思いの高まりにつながっている。また、村の人たちの中学生に寄せる期待を知ることでもできる機会となっている。

体験的な活動を通して身についた人権感覚が、更に深化できる「学習サイクル」の継続した研究推進が期待される。